

新たな始まり

親鸞聖人750回大遠忌

Vol.40

宗門長期振興計画の現状

『拝読 浄土真宗のみ教え』の活用

親鸞聖人七百五十回大遠忌宗門長期振興計画「教学・伝道の振興」のうち、重点項目⑤「時代に即応する教学の振興」において、大遠忌を記念して『拝読 浄土真宗のみ教え』が刊行され、丸二年が経とうとしています。この二年間で増刷は八刷を数え、刊行部数は二〇万部を超えました。このたびの大遠忌法要では、記念布教などにおいても拝読されており、多くの方にこの味わい深い文章に触れていただくこととなりました。

1 『拝読 浄土真宗のみ教え』に

ついて

しみやすい表現によって示し、正しく領解した上で味わいを深めることのできる文章」となるよう、制作されたものです。

『拝読 浄土真宗のみ教え』には、この大遠忌を記念して制作された、「浄土真宗の救いのよろこび」、「親鸞聖人のことば」、「折々のことば」が収載されています。これらは、「親鸞聖人が顕かにされた浄土真宗のみ教えを、現代の人々に親

ここには、み教えが示された文章を声に出して読み、それによって理解と味わいを深めていくという、「御文章」、「領解文」のよき伝統と精神が受け継がれています。文章を声に出してみると、目で追って黙読していたのとはまったく違う

親鸞聖人750回大遠忌
宗門長期振興計画

【基本的な考え方（コンセプト）】

- 『新たな始まり』
～明日の宗門の基盤作り～

【目標】

- 親鸞聖人750回大遠忌法要の修行
- 現代社会に伝える教学・伝道態勢の構築とみ教えに生きる「人」の育成

【重点項目】

- ①法要の修行
- ②記念行事等の推進
- ③協賛行事
- ④伝道態勢の整備

⑤時代に即応する教学の振興

- ⑥新たな門徒の誕生（教線の拡充）
- ⑦国際伝道の推進
- ⑧寺院の活性化対策
- ⑨過疎・過密対策
- ⑩地域社会との交流
- ⑪現代社会への貢献
- ⑫人材育成の新規対策
- ⑬既存の人材育成施策の強化
- ⑭宗務機能の点検と拡充
- ⑮境内地等の整備

印象を受けることがあります。自ら声に出してこそ、そのことばの持つている響きや味わいを、より深く感じることができるとは思いません。『拝読 浄土真宗のみ教え』にはそのような、声に出して拝読することでみ教えの味わいが深められる文章がおさめられているのです。

2 「浄土真宗の救いのよろこび」

「浄土真宗の救いのよろこび」は、親鸞聖人が説かれた阿弥陀如来の本願のみ教えの要を、自らうけとめ、そのよろこびを述べていくものです。

そこには、短いながらも浄土真宗のみ教えの要である、阿弥陀如来の本願、南無阿弥陀仏の名号、信心、称名報恩、

3 「親鸞聖人のことば」

往生浄土、そして親鸞聖人のみ教えを広めていく伝道の心が織り込まれています。くりかえし自ら声に出して読むたびに、み教えに思いを傾け、味わいを深めることができるでしょう。

「親鸞聖人のことば」は、十五章の文章で構成されています。十五章それぞれ

のタイトルを挙げておきましょう。

人生そのものの問い（人間）

凡夫（煩惱）

真実の教え（釈尊と経典）

限りなき光と寿の仏（阿弥陀如来）

他力本願（本願）

如来のよび声（名号）

聞くことは信心なり（聞即信）

今ここでの救い（信の一念）

愚者のよろこび（二種深信）

報恩の念仏（利益）

浄土への人生（証果）

自在の救い（還相）

光の浄土（浄土の本質）

美しき西方浄土（西方浄土）

かならず再び会う（俱会一処）

タイトルからもうかがわれる通り、親鸞聖人のことばをもとに、浄土真宗のみ教えの要が親しみやすく示されています。

日々の勤行や、寺院でのご法座など、

折にふれて声に出し、くり返し拝読いただくことで、み教えの理解と味わいが深められることと思います。

4 「折々のことば」について

「折々のことば」は、年間の仏事とゆかりの深い行事、お正月、お彼岸、お盆、報恩講をテーマに、その由来と味わいについて述べられています。

その名の通り、折々にふれて読み返し、み教えの味わいを深められるように作られています。

5 声をそろえて拝読する

ぜひ一度、日常の勤行、法事の場面など、さまざまな場面で、ご一緒にお参りの方と声を合わせて拝読してみてください。

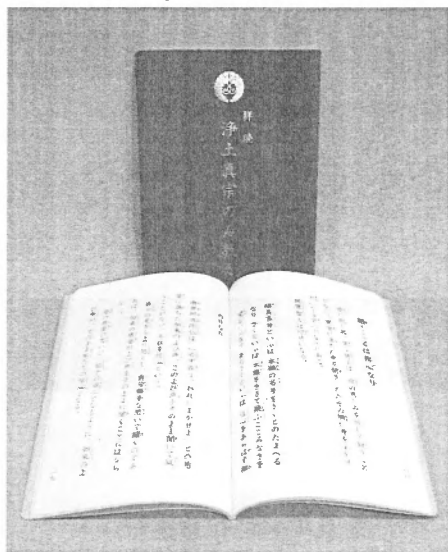
声に出してみることで、いろいろな気づきがあるかもしれません。あるいは、み教えについて、語り合うきっかけにな

るかもしれません。より深く浄土真宗のみ教えをよることばでいただく一助になることでしょう。

6 「拝読 浄土真宗のみ教え」の普及について

『拝読 浄土真宗のみ教え』は、上述のように、大遠忌を記念して、より多くの方々と共にみ教えを拝読し、理解と味わいを深めるべく制作されたものです。その実現にむけて、発刊以降さまざまな普及活動を展開してきました。その一環として、多くの教区・組の『拝読 浄土真宗のみ教え』を用いた研修会に教学伝道研究センターの研究員が出講してきました。

研修会では、『拝読 浄土真宗のみ教え』の制作の意図、内容、構成等について解説し、内容の理解と味わいを深めていただくことができました。また、参加者のみなさまからも、アンケートや聞き取りなどで、『拝読 浄土真宗のみ教え』に対



【『拝読 浄土真宗のみ教え』】

する感想や、用い方などの実情、ご意見をお聞かせいただくことにも努めています。その中から、普及にあたってのさまざまな現状と課題を見いだすことができました。今回は以下に、それらアンケートの調査結果の一部をご報告したいと思います。

まず、「『拝読 浄土真宗のみ教え』の刊行を知っていたかどうか」とお尋ねしたところ、どの研修会においても、七割以上の方が「知っていた」と答えられました。これは、全寺院配付や本願寺新報、本願寺関係の機関誌を用いたさま

ざま広報活動が、一定の成果を上げて高い認知度をもたらしたものと考えられます。

一方、「これまで、『拝読 浄土真宗のみ教え』を読んだことがあるかどうか」という問いに対しては、六割以上の方が「読んだことがない」と答えられ、さらに「これまで、日常の勤行や法座で用いたことがあるかどうか」についても六割以上の方が「用いたことがない」という回答をされました。しかし、本書についての研修会を受講した上で、「これから『拝読 浄土真宗のみ教え』を拝読して

こうと思うかどうか」の質問に対しては、九割近くの方が肯定的に「用いたい」と答えられました。

これは、本書に拝読の一例が示されていますが、具体的に「どのように用いればよいか分からない」といった疑問を持つておられた方が多くいたことを示すとともに、実際に拝読したり、研修会などによって「用い方」や「内

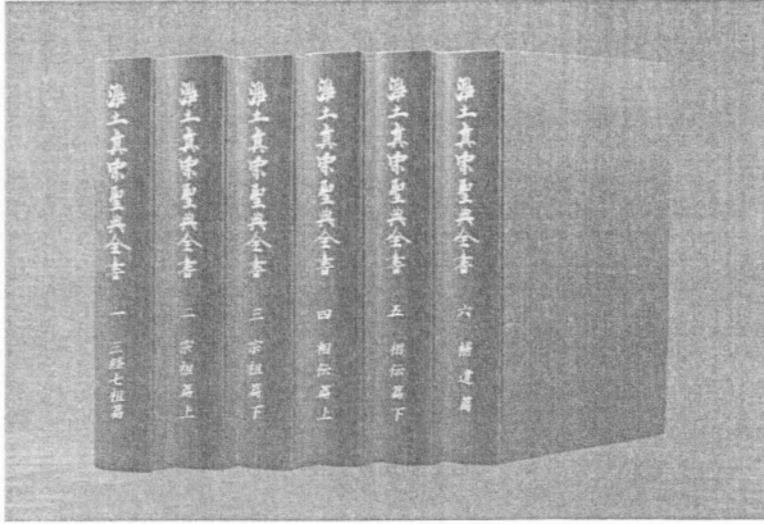


拝読の様子

容」についての理解が深まれば、十分多くの方に味わいを深め、よろこんで拝読していただける可能性を持つものであったことを示していると考えられます。

これらの意見を踏まえ、今後も積極的に研修会等の普及活動を行い、より多くの方と共にこれらの文章を味わえるように努めて参りたいと考えています。

(教学伝道研究センター)



【浄土真宗聖典全書】の刊行イメージ

に関する辞書などの書籍を刊行してきました。

一七六一（宝暦十一）年に勤修された親鸞聖人五百回大遠忌には、親鸞聖人から蓮如上人までの和語の聖教を集めた『真宗法要』六帙三十一帖（一七六五（明

和）年刊」を編纂し、真宗典籍の真偽を簡別してその依り処を明らかにしました。次いで一八六一（文久元）年の六百回大遠忌には、『真宗法要』の字句や引

文、故事を註釈した『校補真宗法要典拠』三十一巻（一八五六（安政三）年刊）を刊行し、聖教を理解する一助となりました。また一九一一（明治四

十四）年の六百五十回大遠忌には、仏教や真宗の語彙全般にわたって解説を施した『仏教大辞彙』七巻

（一九一四（大正三）年刊）を刊行して宗門内外から高い評価を得ました。そして一九六一（昭和三十

六）年の七百回大遠忌には、新しい時代に応じた「聖典意訳」（浄土三部経・七祖聖教へ上中下）・教行信証）五巻（一九六四（昭和二十九）年刊）を編纂し、今日の『現代語版聖典』へと発展する礎を築きました。これらは浄土真宗の教義の根幹を世に伝えるものとして重要な位置を占めてきま

した。

3 『浄土真宗聖典全書』の特徴

『聖典全書』は、次の四部構成とし、六巻立てになります。

- 一、三経七祖篇（一巻）
- 二、宗 祖 篇（上下二巻）
- 三、相 伝 篇（上下二巻）
- 四、補 遺 篇（一巻）

またその内容は、次の通りです。

- 一、「阿弥陀仏のみ教えが説かれた根本聖典の浄土三部経とその異訳の経典、浄土真宗の教義体系を支える七高僧の論釈」（三経七祖篇）
- 二、「浄土真宗のみ教えを開示された親鸞聖人の撰述聖教や言行録、並びに編纂・加點・書写されたもの、及び聖人が尊崇された聖教」（宗祖篇）
- 三、「親鸞聖人のみ教えを継承された覚如・存覚・蓮如上人などの著述や